第Ⅵ章　総　括

今帰仁城跡外郭地区の発掘調査成果について

平成17年度より発掘調査が開始された外郭は、城内10の郭のなかでもっとも北側にある郭で昭和54年に追加指定された地域にあたる。外郭の面積は約20,000m²で今帰仁城跡の郭の中でも最も広い地域となる。調査に先立って地形や石垣などの地表面で観察できる遺構及び地籍を根拠に東・西・中・城外西・城外東区の５つのエリアに分け、さらに外郭東区をⅠ～Ⅸ区の9つに区分けした。

まず平成17年度に試掘調査を行い、Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区でグスク時代に相当する包含層及び遺構の存在が確認され、Ⅰ・Ⅴ区ではグスク時代の遺構が確認されたが、その殆どを岩盤が占め、平坦地が乏しい地区であることから、外郭東区の主体的な地域ではないことが確認された。またⅨ・Ⅵ区においてはウーニーが所在し、現在も地表に遺構があったため、調査は試掘に留め保存地区とした。平成18年度からは前年度の試掘調査をもとにⅢ・Ⅳ・Ⅶ区を調査対象とし約1,000m²の発掘調査を行った。本報告はこのⅢ・Ⅳ・Ⅶ区の報告である。またⅢ区とⅣ区については調査の結果、一つのエリアとして扱う。以下、Ⅲ・Ⅳ区、Ⅶ区のテラス毎に概述し、結びとしたい。

1.Ⅲ・Ⅳ区

先ずⅢ・Ⅳ区の使用年代と層序を見ていきたい。Ⅲ・Ⅳ区のグスク時代の遺物包含層は大きくⅡ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層の4つに分けることができる。Ⅲ・Ⅳ区において広範囲に分布し堆積の厚いⅡ層は、色調によってⅡ上層とⅡ下層の二つに細分することができ、Ⅱ上層からⅡ下層に移行するに従い、出土遺物の組成が暫時的に古い様相へと変化することが確認できるが、遺物組成は類似しており時期的な差は大きくないものと考えられる。このⅡ層からは青花や龍泉窯系青磁Ⅵ類がほとんど出土しないことから、15世紀前半頃までの堆積層と考えられる。このⅡ層の下層より検出されるⅢ～Ⅴ層からは13世紀後半～15世紀前後の遺物が主体的に出土し、年代的にⅡ層とは一線を画する。以上のように包含層で確認すると二つの使用時期が確認できる。

次に遺構より出土した遺物をみると、15世紀後半～16世紀代に対応すると考えられる遺物はほとんど出土しておらず、また、13世紀後半～14世紀中頃の遺物がまとまって出土する遺構(SK266)と15世紀前半の遺物が主体的に出土する遺構（SK170、SK295）が存在することから、Ⅲ・Ⅳ区においては13世紀後半頃から使用されはじめ（主郭Ⅰ～Ⅱ期)、14世紀後半～15世紀前半をピークに（主郭Ⅲ期)、15世紀後半頃にはすでに使用されていなかった（主郭Ⅳ期以降）のではないかと考えられる。

Ⅲ・Ⅳ区の使用年代を確認してきたが、次に用途について考えていきたい。先ず遺構としては、Ⅲ・Ⅳ区ではピットの総数299基、土坑9基（SB01・02含む)、植栽痕16基、溝状遺構4基が検出されている。

主郭Ⅰ～Ⅱ期相当期段階の遺構として、Ⅲ・Ⅳ区では上記の遺構群を構築する以前の造成層（第1～3造成層）の存在がトレンチ調査で確認されており、斜面地や窪んだ地形のところに土を入れ造成し整備を行ったあと、その上面にピット等の遺構群が築かれている。Ⅲ・Ⅳ区の東側（U-35・36）では、Ⅰ層を除去した段階で地山面より遺構が検出されたため、プランを確認できた柱穴列遺構（PL1）や土坑（SK266）の半裁を行って追調査を実施した。PL1とSK266に関しては13世紀後半～14世紀代の遺物に限られ、主郭Ⅰ期段階の遺構と判断できるであろう。しかし、今回の調査では保存修理事業の観点からⅡ層を除去した段階で発掘を止めたため、地山面で検出され

た多くの遺構群をⅠ～Ⅱ期、もしくは主郭Ⅲ期段階のいずれの時期に比定される遺構か判断できていないため、詳細はよくわかっていない。

次に主郭Ⅲ期相当期段階にあたる特徴的な遺構として、Ⅲ・Ⅳ区の中央部より検出されたSB02があげられる。これは長軸240cm×短軸170cmの土坑（炉跡）を伴う掘立柱建物であり、城跡内または今帰仁ムラ跡においてもこれほどの規模の大きな炉跡は確認されていない。併せてSB01（竪穴建物）やSK170等の遺構群は、これまで集落遺跡等で掘立柱建物（母屋）とセットで検出されている事例とはその規模と出土量において特異な様相を示し、今帰仁城でも特徴的な検出遺構であると考えられる。これら遺構群はこれまで調査されてきた志慶真門郭、主郭（按司や家臣の居住域）とは様相を異にし、Ⅲ・Ⅳ区における機能を考える上で重要な資料になると思われる。その後15世紀後半以降（主郭Ⅳ期段階相当期）になると、この地区における恒常的な生活の痕跡は認められなくなることから、意図的に空閑地化されたと考えられる。

2. Ⅶ区

続いてⅦ区の使用年代と層序をみていきたい。Ⅶ区はSR3とSR4の間にあるテラスで、層序は南東側（SR3側）から北西側（SR4側）へと包含層が落ち込み、かなりの量の土が低い土地へ流れ込んでいる状況が窺える。この包含層の落ち込み部（流れ込み部）では堆積状況も複雑であった。Ⅶ区で検出されたグスク時代の遺物包含層は、大きくⅡ層、Ⅲ層、Ⅳ層に分けることができるが、Ⅲ・Ⅳ区で確認されたⅢ～Ⅴ層のような13世紀後半～14世紀前半の遺物を主体的に出土する包含層は確認されなかった。Ⅶ区では15世紀頃の遺物を主体としながらも、青花等の16世紀代の遺物が相対的に多く含まれる状況からⅢ・Ⅳ区に比べ一段階新しい時期（主郭Ⅳ期）に対応すると考えられる。

Ⅶ区からは多くの遺構が検出されており、ピット総数399基、土坑9基、石列１基が確認されている。Ⅲ・Ⅳ区と同様にⅦ区においてもこれらの遺構群を構築する以前の造成層（第4造成層）の存在が確認されており、斜面地または岩盤が多く露頭する箇所に土を入れ造成を行い、その上面に遺構群が構築されている。これら遺構群は、R-33・34に柱穴が集中（以下、Ⅶ区柱穴集中箇所）し、Q-34、35においては径の大きな柱穴が散在（以下、Ⅶ区柱穴散在箇所）する状況が窺える。Ⅶ区の柱穴集中箇所においては、柱間が不均等であるため検討を要するが2棟の掘立柱建物跡（母屋）のプランがSR4の長軸と平行するように検出された。これらの掘立柱建物跡はⅢ層を除去した段階で検出されており、柱穴内からも同時期の遺物が出土しているため、15世紀から16世紀頃の年代が考えられる。また、Ⅶ区柱穴散在箇所においても掘立柱建物跡（母屋）に伴う１棟の付帯施設（四本柱建物跡）が推定されており、遺構の構成や検出状況は今帰仁ムラ跡屋敷地3や屋敷地4と近似する。また上記の遺構群とは検出面が異なると考えられる遺構群が、Ⅳ層の下層（S-32トレンチ）より検出されている。今回の調査は保存を目的とし下層の状況は狭小なトレンチ調査に留めているため、これらの遺構群がどのように分布するのかは情報不足であるが、主郭Ⅰ～Ⅲ期並行期においても生活の痕跡を見ることができる。

3. 外郭東区城壁の構築年代について

外郭東区城壁の年代について考えてみる。今帰仁城跡の城壁に関しては、主郭発掘調査において第Ⅰ期（13世紀後半～14世紀初頭）の城柵による防御施設から、第Ⅱ期（14世紀前半～14世紀中頃）の石積みによる城壁の構築の始まりが確認されている。このため、今帰仁城跡の城壁は主郭の囲繞開始より規模を拡大させ、山北滅亡の15世紀前半頃（第Ⅲ期）までに造られたと考えられてきた。外郭城壁においても、その積み上げ方法や、主郭からより遠い箇所にあるという観点から、山北終末期（第Ⅲ期）の城壁であろうと考えられてきたが、これまで未調査であったため具体的な

構築年代については不明であった。今回の外郭調査では根石確認トレンチを4箇所設定し年代把握を試みた。

トレンチ調査の結果、外郭石垣は場所によって積み方が異なり、地山面に礫を敷き均し造成し石垣を積み始める方法や、土を入れて造成した後に石垣を構築する方法があった。特に根石確認トレンチ④では後者の方法で造成後に石を積み始めるが、根石の下に入り込む層（Ⅴ区Ⅱe層）からグスク土器や龍泉窯系青磁Ⅱ類、白磁C2群で構成される遺物が得られた。これら出土遺物は主郭第Ⅶ層の遺物組成と似ており（第Ⅰ期）、結果から判断するとかなり早い段階から築城が開始され始めたということになるが、他のトレンチでは④と同様の出土状況ではないため、なお一層の検討を要する。しかし前述してきたような山北終末期に石垣が造られ始めたということより、主郭城壁築城期と近い時期に石垣を造っていた可能性がトレンチ④の状況から想定される。さらにトレンチ調査を複数箇所実施して、追加検討を行っていきたい。

4. 遺物について

今回の調査によって得られた遺物は土器、青磁、白磁、青花、褐釉陶器、タイ産、ベトナム産などの輸入陶磁器をはじめ、玉、金属製品、石製品など多岐にわたる。また、城内外の調査例と同様、9割以上が中国陶磁で構成されている。これまで主郭以外の調査では14世紀後半～16世紀の遺物が多いことが志慶真門郭や城外西地区の調査でわかっていたが、Ⅲ・Ⅳ区、Ⅲ～Ⅴ層においてグスク土器・龍泉窯系青磁Ⅱ類遺物が出土し、年代的には主郭Ⅰ～Ⅱ期（13世紀後半～14世紀中頃）の遺物で構成されることはこれまでの調査と異なる。加えてⅢ・Ⅳ区では龍泉窯系青磁Ⅵ類・青花の出土が見られないこと、またⅦ区では龍泉窯系青磁Ⅵ類・青花等の遺物が見られ、Ⅲ・Ⅳ区に比べ一段階新しい時期まで使用されていた様子を出土傾向から確認できる。中でも特筆すべき遺物としてSK170より良好な状態で出土した一括陶磁器類がある。青磁は龍泉窯系青磁Ⅳ～Ⅴ類、青花は元青花が得られたのみである。銭貨は26点出土、鋳造年の新しいもので洪武通寶(初鋳：1368年)となる。使用年代は青磁から14世紀後半～15世紀前半の年代幅で捉えられる。

5. おわりに

以上見てきたように外郭東区発掘調査の成果をまとめてきたが、最後に今帰仁城跡における外郭地区の土地利用変遷をみていきたい。

城壁によって囲まれない時期において、外郭は城造りのために最初に入ったであろう人たちの生活の痕跡がトレンチ調査で見つかっている。全面を発掘していないため、集落であったのか確定させるにはまだ情報不足の感は否めないが、Ⅲ・Ⅳ区Ⅲ～Ⅴ層（主郭Ⅰ～Ⅱ期）の段階に、数ヵ所で造成を行い平坦地を造り出し、その上に遺構群を構築している。その後、少なくとも14世紀中頃～15世紀前半までに城壁が築かれ始め、Ⅲ・Ⅳ区では土坑を複数配置する遺構群、Ⅶ区では今帰仁ムラ跡で見られるような母屋と高倉のセット関係が確認できる（主郭Ⅲ期）。この土地利用は主郭や志慶真門郭とは全く異なった景観となっており、どちらかというと今帰仁ムラ跡と様相が似るがそれとも少し違う。加えてⅢ・Ⅳ区では15世紀後半以降の遺物が完全に無く、意図的な空閑地化が創出されたと考えられる。15世紀後半頃は監守が城主として首里から派遣されているが、このことと関係があるのかもしれない。これを追認する事例として、次回報告となるが現在調査中のⅧ区において、16世紀を中心とする遺物群、監守に関係する建物と想定される大規模な遺構が検出されている。この様な状況から類推すると外郭地区において監守による居住地の再配置、または城郭内機能の再配置に伴うⅢ・Ⅳ区利用の制限があったことを想定することができる。

外郭の土地利用変遷では、もともと集落であった地域がやがて城郭へ取り込まれながら整備されていき、また機能の再配置も行われた様子が若干ながら想定できた。一方で外郭東区の性格を考え

ていくうえで、城壁の構築時期の検証は宿題を残すかたちであるが、SB01やSB02などの特異な遺構、または遺物等の出土様相から勘案して、何かしらの役割を担っていた施設が存在し、城郭機能の一端を担っていたと考えられる。今帰仁城跡では各郭が有機的に結びつき機能分化されていた様子（宮城 2006）を今回の調査成果から知ることができる。

《参考文献》

新垣力・ほか「沖縄における14世紀～16世紀の中国産自磁の再整理」『沖縄埋文研究』3
沖縄県埋蔵文化財センター

上原静　2004年「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』新人物往来社

沖縄県立埋蔵文化財センター　2007年『渡地村跡－臨港道路那覇1号線に伴う緊急発掘調査報告－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集

沖縄県教育委員会　1998年『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』
沖縄県文化財調査報告書第132集

瀬戸哲也・ほか　2007年「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－」
『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編

永井久美男　2002年『新版　中世出土銭の分類図版』高志書院

今帰仁村教育委員会　1983年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ－志慶真門郭の調査－』
今帰仁村文化財調査報告書第9集

今帰仁村教育委員会　1991年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ－主郭（俗称本丸）の調査－』
今帰仁村文化財調査報告書第14集

今帰仁村教育委員会　1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』
今帰仁村文化財調査報告書第12集

今帰仁村教育委員会　1999年『今帰仁城跡環境整備報告書Ⅰ』

今帰仁村教育委員会　2005年『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ－今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』今帰仁村文化財調査報告書第20集

今帰仁村教育委員会　2006年『史跡　今帰仁城跡－外郭発掘調査概報－』
今帰仁村文化財調査報告書第23集

今帰仁村教育委員会　2007年『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ－村内遺跡発掘調査報告－』
今帰仁村文化財調査報告書第24集

今帰仁村教育委員会　2008年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ－今帰仁ムラ跡西区屋敷地5の調査－』
今帰仁村文化財調査報告書第25集

宮城弘樹　2006年「グスクと集落の関係について（覚書）－今帰仁城跡を中心として－」
『南島考古』第25号　沖縄考古学会

宮城弘樹　2007年「アザナ城壁考」『今帰仁グスク』創刊号　今帰仁グスクを学ぶ会

図版1　今帰仁城跡

1. 今帰仁城跡空撮

2. 調査区全景

図版2　東側城壁（1）

1．東側城壁全景

2．東側城壁全景

3．東側城壁全景

4．東側城壁全景

5．OP内壁（1）

6．OP内壁（2）

7．LM内壁

8．MN内壁

図版3　東側城壁（2）

1．KL内壁

2．JK内壁

3．OP外壁

4．NO外壁

5．LM外壁

6．KL外壁

7．JK外壁

8．IJ外壁

図版4　根石確認トレンチ・SR2

1．確認トレンチ1

2．確認トレンチ2

3．確認トレンチ3

4．確認トレンチ4

5．SR2調査状況

6．SR2内壁

7．SR2外壁着手前

8．SR2外壁完了

1. 鳥居東側支柱掘削作業状況

2. 鳥居東側支柱北壁セクション

3. 墓撤去試掘トレンチ作業状況

4. 墓撤去試掘トレンチ完掘状況

5. レコーラウーニー（ウーニフジ祭祀の状況）

図版6 Ⅲ・Ⅳ区

1．Ⅲ・Ⅳ区全景

2．作業状況

3．青磁出土状況（52-4）

3．青花出土状況（97-13）

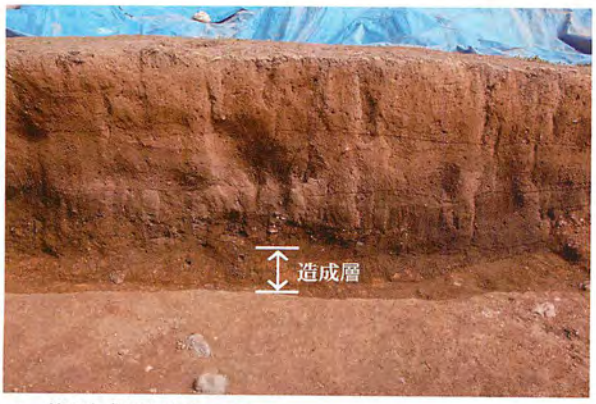
4．玉出土状況（83-190）

図版7 Ⅲ・Ⅳ区 層序 第1～4造成層セクション

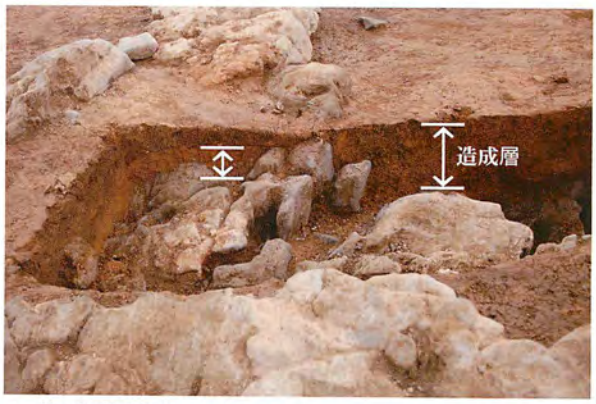
1．Ⅲ・Ⅳ区基本層序（U-33南壁）

2．第1造成層セクション

3．第2造成層セクション



4．第3造成層セクション



5．第4造成層セクション

図版8 Ⅲ・Ⅳ区 SB01

1．SB01検出状況

2．SB01半裁完了状況

3．pit252

4．pit252

1．SB02（SK295）検出状況

2．SK295　iia層検出状況

3．SK295セクション

4．pit144石製礎盤

5．vi層検出状況

2．炉床面検出の炭化ムギ

3．SB02、03完掘状況

4．SK295　炉底

図版10 Ⅲ・Ⅳ区 SK170

1．SK170検出状況

2．SK170セクション

3．勾玉出土状況（55-33）

4．SK170半裁状況

5．SK170完掘

図版11 Ⅲ・Ⅳ区 PL1・SD158・SD286・SK328・SK266

1. PL1 検出状況

2. SD158検出状況

3. SD286検出状況

3. SK328半裁完了状況

4. SK266掘り下げ状況

図版12 Ⅶ区

1．Ⅶ区全景

2．S-32畝検出状況

3．S-32 Ⅱ層検出状況

4．S-32遺構検出状況

5．S-33　作業状況

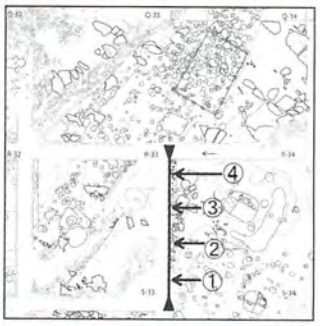
図版13　S-34西壁セクション・サンゴ敷き遺構

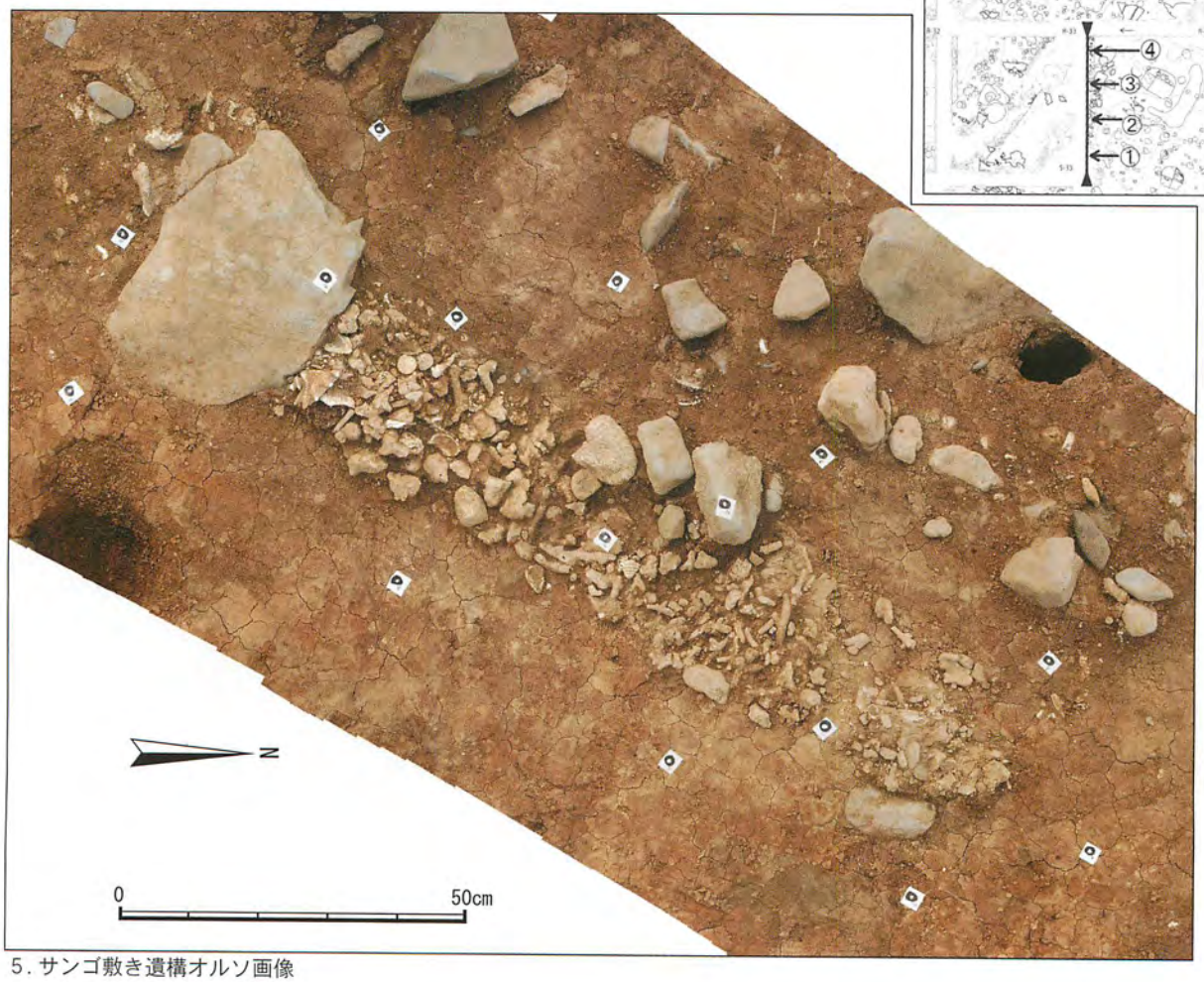
1．S-34西壁①

2．S-34西壁②

3．S-34西壁③

4．S-34西壁④





5．サンゴ敷き遺構オルソ画像

図版14 Ⅶ区 SB04・SB05・SB06・SK898

1．SB04・SB05半裁状況

2．SB06検出状況

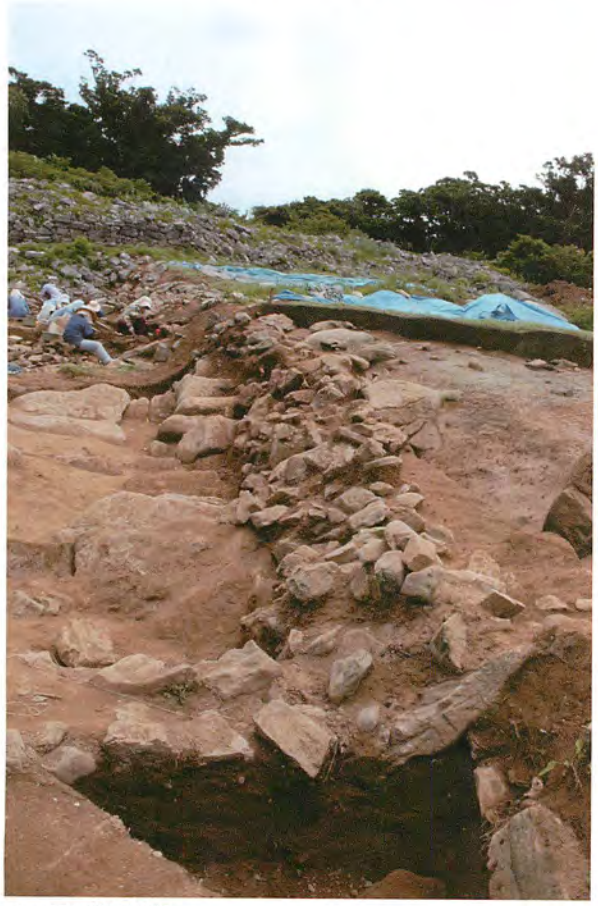
3．SK898　検出状況

4．SK898　a-a′セクション

1．SR3　着手前

2．SR3　検出状況

3．SR3　調査完了



4．SR4 検出状況

5．SR4　土留め検出状況（手前が第1期土留め）

図版16 Ⅲ・Ⅳ区 SR2出土遺物

Ⅲ・Ⅳ区　SR2　出土遺物

図版17　墓撤去トレンチ出土遺物

墓撤去トレンチ出土遺物

図版18 Ⅲ・Ⅳ区 SB01出土遺物

Ⅲ・Ⅳ区　SB01　出土遺物

Ⅲ・Ⅳ区　SB02　出土遺物

図版20　Ⅲ・Ⅳ区　SK170出土遺物（1）

Ⅲ・Ⅳ区　SK170　出土遺物（1）

図版21　Ⅲ・Ⅳ区　SK170出土遺物（2）・SB02出土遺物

47-11

52-2

52-3

52-4

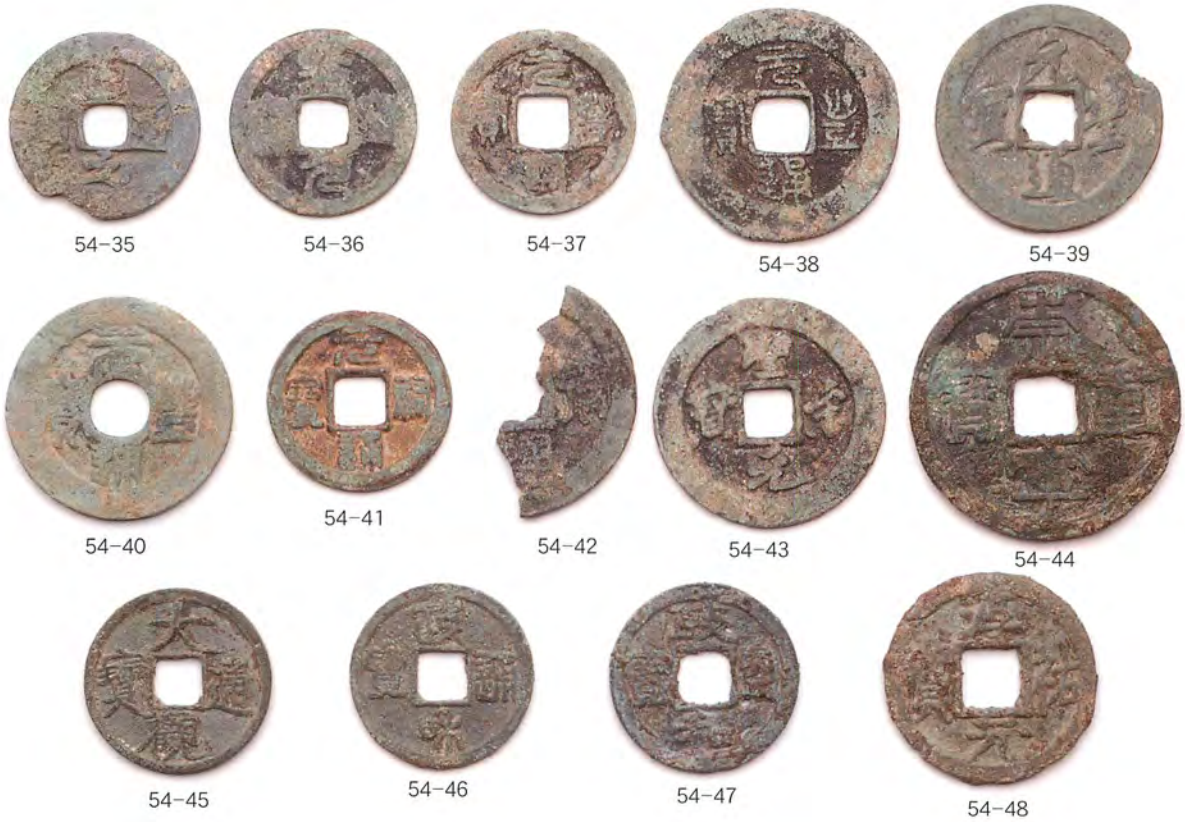
52-5

52-9

Ⅲ・Ⅳ区　SK170　出土遺物（2）・SB02出土遺物

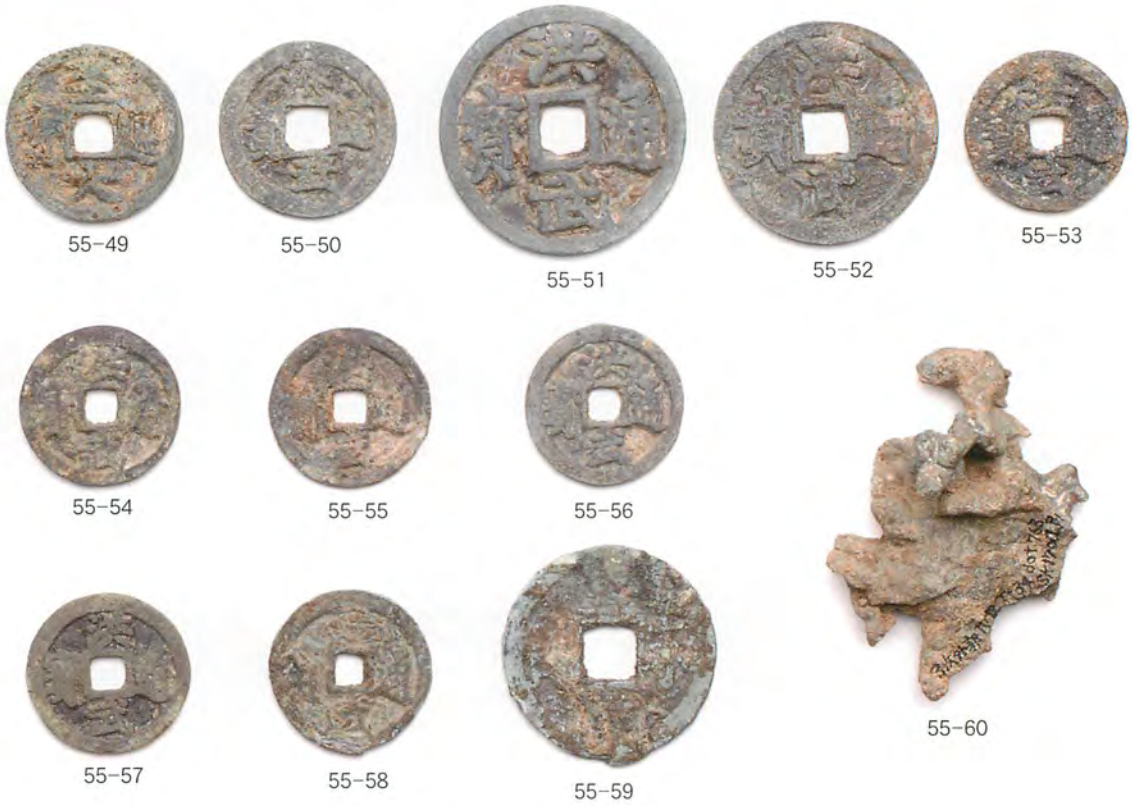
図版22　SK170出土遺物（3）

Ⅲ・Ⅳ区　SK170　出土遺物（3）



Ⅲ・Ⅳ区　SK170　出土遺物（4）

図版24　Ⅲ・Ⅳ区　SK170出土遺物（5）



Ⅲ・Ⅳ区　SK170　出土遺物（5）

図版25　Ⅲ・Ⅳ区　SK266・SK328出土遺物

Ⅲ・Ⅳ区　SK266　出土遺物

Ⅲ・Ⅳ区　SK328　出土遺物

図版26　Ⅲ・Ⅳ区　SK158出土遺物

Ⅲ・Ⅳ区　SK158　出土遺物

Ⅲ・Ⅳ区　SD286　出土遺物

図版28　Ⅲ・Ⅳ区　第1～3造成層・SX1出土遺物

第1～3造成層出土遺物

Ⅲ・Ⅳ区　SX1　出土遺物

77-1
77-2
77-3
77-4
77-5
77-6
77-7
77-8
77-9
77-10
77-11
77-12
77-13
77-14
77-15
77-16
77-18
77-19
77-20
77-22
77-21
77-23
77-24
77-25
77-26
77-27
77-28
77-29
77-30
77-31
77-32
77-17

Ⅲ・Ⅳ区　Ⅲ～Ⅴ層出土遺物

図版30　Ⅲ・Ⅳ区　Ⅱ下層出土遺物（1）

78-50

Ⅲ・Ⅳ区　Ⅱ下層出土遺物（1）

Ⅲ・Ⅳ区　Ⅱ下層出土遺物（2）

図版32　Ⅲ・Ⅳ区　Ⅱ下層出土遺物（3）

Ⅲ・Ⅳ区　Ⅱ下層出土遺物（3）

Ⅲ・Ⅳ区　Ⅰ～Ⅱ層出土遺物（1）

図版34　Ⅲ・Ⅳ区　Ⅰ～Ⅱ層出土遺物（2）

Ⅲ・Ⅳ区　Ⅰ～Ⅱ層出土遺物（2）

図版35　Ⅲ・Ⅳ区　Ⅰ～Ⅱ層出土遺物（3）

Ⅲ・Ⅳ区　Ⅰ～Ⅱ層出土遺物（3）

図版36

Ⅶ区　遺構内出土遺物

Ⅶ区　遺構内出土遺物

図版37 Ⅶ区 SR4出土遺物

Ⅶ区　SR4出土遺物

図版38

Ⅶ区　出土遺物（1）

Ⅶ区　出土遺物（1）

103-23
103-24
103-25
103-26
103-27
103-28
103-29
103-30
103-31
103-32
103-33
103-34
103-35
103-36
103-37
103-38
103-39
103-40
103-41
103-42
103-43
103-44
103-45
103-46
103-47
103-48
103-49
103-50
103-51
103-52
103-53

Ⅶ区　出土遺物（2）

図版40

Ⅶ区　出土遺物（3）

Ⅶ区　出土遺物（3）

図版41　Ⅶ区　出土遺物（4）

Ⅶ区　出土遺物（4）

図版42

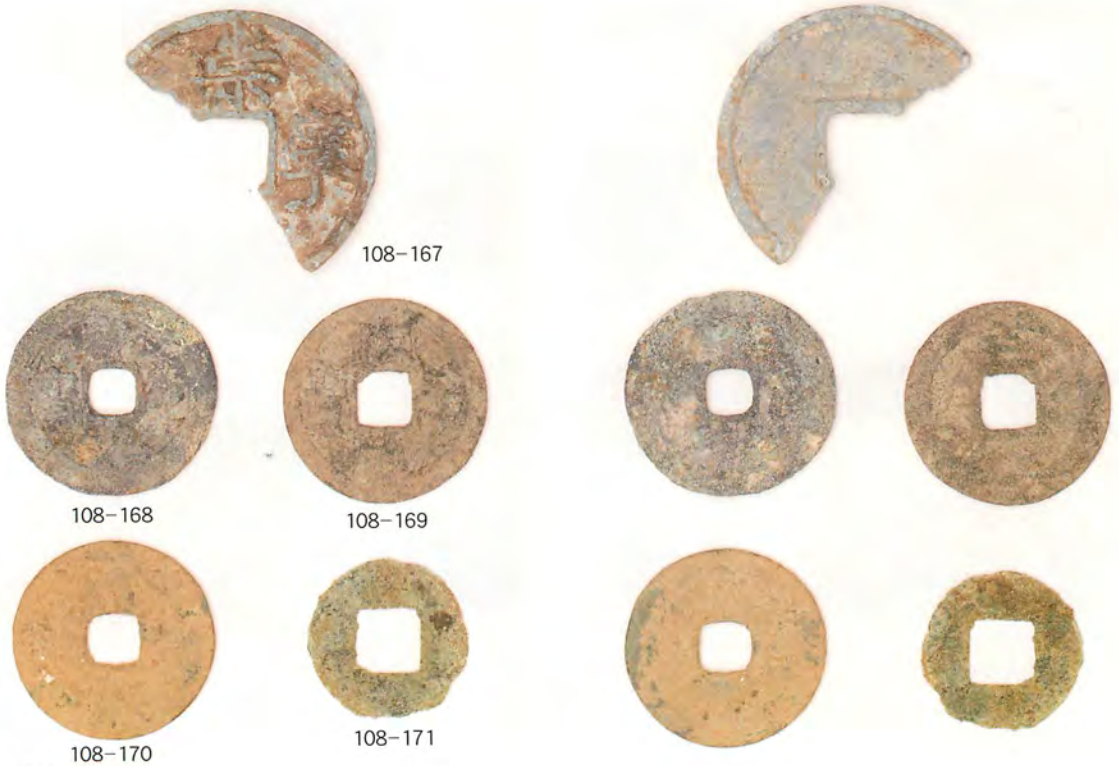
Ⅶ区　出土遺物（5）

Ⅶ区　出土遺物（5）

107−140
107−141
107−142
107−144
107−145
107−143
107−146
107−139
107−147
107−148
107−150
107−152
107−149
107−151
107−151
107−154

Ⅶ区　出土遺物（6）

108-158
108-157
108-156
108-160
108-159
108-162
108-155
108-161
108-163
108-166
108-164
108-165


108-167
108-168
108-169
108-170
108-171

Ⅶ区　出土遺物（7）

109-172
109-173
109-174
109-175
109-176
109-177
109-178
109-181
109-182
109-179
109-180
109-183
109-184
109-185
109-186
109-187
109-188
109-189
109-195
109-197
109-198
109-199
109-191
109-193
109-192
109-194
109-190
109-200
109-201
109-202
109-203
109-204

109-205
109-196

Ⅶ区　出土遺物（8）

110-229
110-228
110-226
110-227

110-206
110-207
110-208
110-209
110-210
110-211
110-212
110-213
110-214
110-215
110-216
110-217
110-218
110-220
110-223
110-219
110-221
110-224
110-225
110-226

Ⅶ区　出土遺物（9）

報 告 書 抄 録

ふりがな	なきじんじょうせきはっくつちょうさほうこくしょ 4
書名	今帰仁城跡発掘調査報告書 Ⅳ
副書名	今帰仁城跡外郭発掘調査報告書1
巻次	
シリーズ名	今帰仁村文化財調査報告書
シリーズ番号	第26集
編著者名	玉城靖・宮城弘樹・金武正紀・與那嶺俊・具志堅亮・柴田圭子・髙島裕之 新島奈津子・亀井明徳・半田素子・千田寛之・樋泉岳二・名島弥生 菅原広史
発行機関	今帰仁村教育委員会
所在地	〒905-0592　沖縄県今帰仁村字仲宗根232　　TEL0980-56-3201
発行年日	西暦2009年3月31日（平成21年）

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″		m²	
今帰仁城跡（なきじんじょうあと）	今帰仁村（なきじん） 字今泊（いまどまり）	473065		26°41′34″	127°55′41″	17年度 2005.5.6 ～ 2006.3.31 18年度 2006.4.24 ～ 2007.3.30	800m² 1,400m²	今帰仁城跡史跡等総合整備活用推進事業に係る発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今帰仁城跡	城跡	グスク時代 （13世紀から 16世紀）	城壁 柱穴 土坑 溝 土留石積み ほか	グスク土器 カムィヤキ 中国陶磁器 青磁 白磁 青花 褐釉陶器 瑠璃釉 タイ陶磁 韓国陶磁 ベトナム陶磁 玉類 銭貨 金属製品 石製品 骨製品（サイコロ） 等	今帰仁城跡の北側に所在する郭内の機能と変遷を確認。今帰仁城跡の史跡整備を実施。

今帰仁村文化財調査報告書第26集

今帰仁城跡発掘調査報告Ⅳ

発行　2009年 3 月31日
今帰仁村教育委員会
沖縄県今帰仁村字仲宗根232
TEL　0980－56－3201

印刷　沖縄高速印刷株式会社
沖縄県南風原町字兼城577
TEL　098－889－5513